

〈2016年度長野大学研究助成金による研究報告〉

(準備研究)

場面緘黙状態発現に関わる環境因子の影響の検討 —長野県と沖縄県宮古島市の地域特性と場面緘黙発現率の比較—

高木 潤 野*

Junya TAKAGI

研究実績の概要

本研究は、場面緘黙状態発現に関わる環境因子の影響の検討にあたって、今後の研究を行うための予備的な研究である。今後、対象を沖縄県宮古島市内の小中学校や高等学校に広げ、調査を実施する予定である。

「場面緘黙」とは、話す力を有しているにも関わらず、学校や職場など特定の社会的状況において話すことができなくなってしまう状態を指す。発達障害者支援法において定義される「発達障害」の1つにも分類され、有病率は0.2%~1%程度と推測されている。ICF(国際生活機能分類)(WHO, 2001)では、「障害」を本人に起因する医学的な問題から直線的に派生するだけでなく、本人自身や本人を取り巻く様々な背景因子との相互作用の中で生じる「活動」の制限や「参加」の制約であると定義している。場面緘黙に関しても、その人を取り巻く様々な環境(家庭、友だち、学校、地域等)の在り方によって障害の状態が大きく左右される。従って、場面緘黙の実態を明らかにするためには、場面緘黙児自身のみならず、本人を取り巻く様々な環境についての検討が必要である。しかしこれまで、わが国においては場面緘黙に関わる環境因子の影響については十分な検討が行われていない。

Bronfenbrenner (1979) は、積極的に成長しつつある人間と、そうした発達しつつある人間が生活している直接的な行動場面の変わりつつある特性との間の漸進的な相互調整についての科学的研究を「人

間発達の生態学」と呼んでいる。人間発達の生態学においては、発達しつつある人間がおかれる環境を「マイクロシステム」「メゾシステム」「エクソシステム」「マクロシステム」として、位相的に同じ中心をもつ入れ子構造として捉えている。これらのうち、日々の生活における友人関係や教師との関係である「マイクロシステム」や、家庭と学校、専門機関との連携のような相互の関係である「メゾシステム」だけでなく、その人自身とは直接関わりを持たないが中・長期的に見ると大きな影響を与える地域や社会の資源である「エクソシステム」や、信念体系やイデオロギーといった文化レベルで存在する「マクロシステム」も場面緘黙に影響を与えることが考えられる。

本研究では場面緘黙に関わる広範囲な環境因子について検討を行うため、沖縄県宮古島を調査の対象とした。宮古島市は沖縄本島から約300km離れており、宮古島他6つの島から構成されている。人口は約5万人であり、1学年あたりの人口は約600人程度である。市内には小学校20校、中学校16校、高等学校4校、及び特別支援学校1校がある。ほとんどの小学校は1学年1クラスであるためクラス替えのある学校は少なく、保育園・幼稚園から中学校までほぼ同じクラスメイトとなることも多い。また島内への移住者はあるものの人の移動は少なく、多くの島民は出生から高校卒業までほぼ同一のコミュニティで生活するため、生活圏内では関わる人の多くは知り合いであるという。このような地域の特性は、環境との相互

*社会福祉学部准教授

作用で生じる場面緘黙に大きな影響を与える可能性が考えられる。これらのことから、長野県内と宮古島市、及び大都市圏とを比較することで、場面緘黙の発現や持続と地域特性との関係が明らかにできるのではないかと考えた。

本年度の長野大学助成金準備研究の調査では、宮古島市にある場面緘黙児の親の会を対象としたデータ収集を行った。聴き取りは親の会会員である保護

者に対して半構造化面接により行った。また調査にあわせて、親の会主催による講演会、及び地域の小学校おける教育相談を実施した。講演会では、地域の教育関係者等の支援者の他、保護者や当事者等約200名の参加があった。今後は調査対象を保護者だけでなく小中学校や高等学校に広げ、地域特性と場面緘黙の発現率に関わるより実証的なデータを得たいと考えている。